

星虫

原作／岩本隆雄（ソノラマ文庫刊）
脚本／池田眞也

『星虫』登場人物

氷室友美……………宇宙飛行士を夢見る女子高生

相沢広樹（通称寝太郎）……………友美のクラスメイト

吉田秋緒……………科学者。寝太郎の実姉

宮田直人……………友美のクラスメイト

田中隆……………友美のクラスメイト

松本洋子……………友美のクラスメイト

佐久間和美……………宇宙船の発見者

相沢老人……………地主 寝太郎の祖父

篠原昭二……………実業家

氷室幸雄……………友美の姉

教師

友美の父親

友美の母親

リポーター

おじさん……………寝太郎の父親

『星虫』

原作／岩本隆雄（ソノラマ文庫刊）
脚本／池田眞也

#テロップ

「ほんのすこしだけ、未来の物語」

#屋内プール（友美のマンションの地下一階）

バタフライで泳ぐ氷室友美（16）

友美の声「なる。絶対になる」

#友美のマンション 前

ジャージ姿の友美、空を見上げる。

星の輝く夜空。流星雨。

走り出す友美。

#道

走る友美。スピードが上がっていく。

友美の声「なる。絶対になる」

#NASDA種子島宇宙センター（回想）

観望台からロケットの打ち上げを待っている人々。その中に祖

父母、両親、兄と一緒にいる氷室友美（5）もいる。

泣きながらだだをこねている友美。

友美「もういいよ。帰ろうよ」

母親「友美ちゃん、もうちよつとだけ我慢して。すぐに終わるから」

祖父「ロケットが飛んでいくんだぞ」

友美「もう見たよ。つまんないよ」

カウンタダウンのアナウンスが観望台に響く。

アナウンス「百八十秒前」

観客たちは徐々に話すのをやめ、辺りに緊張感が生まれる。

泣き止んで顔を上げる友美。

ロケットにくぎ付けになっている観客たち、そして友美の家族。

発射台に立っている巨大なH-Ⅱロケット。

アナウンス「十、九、八、七、六、五」

ロケットのメインエンジンに点火される。吹き上がる白い水蒸気。

驚く友美。

アナウンス「四、三、二、一、〇」

固体ブースターに点火され、ロケットがゆっくりと上昇していく。

観客から歓声。

ロケットの轟音。すべての音はかき消される。

#友美の想像(回想)

ロケットとともに飛んでいく友美の体。

小さくなっていく地球。

大気圏を抜け、宇宙に向かうロケットと友美。

#NASA種子島宇宙センター(回想)

ロケットが消えた方向を見つめている友美。

観客は帰ってしまい、あたりには友美の家族しかいない。

母親「もう行こう、友美ちゃん。みんな帰っちゃったよ」

空を見つめながら動こうとしない友美。

#祖父母の家(回想)

窓から夜空を眺めている友美。

母親と祖父が卓袱台に夕食を並べている。

母親「ごはんできたよ。おいで」

友美「大人になったらあのロケットに乗る。友美が操縦して宇宙に行く」

父親「あのロケットには人は乗っていないんだよ。それだったらスペースシャトルだな」

友美「スペースシャトル？」

母親「お父さん！」

祖父「電車の次はロケットか？友美は男の子みたいだなあ」

母親「そうなのよ。保育園でもけんかばかり。もうちよつと女の子らしくしてくれないかな」

科学の本を読んでいた兄の幸雄が顔をあげる。

幸雄「無理だよ。スペースシャトルのパイロットは女にはなれないんだ」
友美「え？」

幸雄「ほらここに書いてある」

読んでいた本を友美にも見せる。

幸雄「それに『いままでアメリカ軍のテストパイロット以外がなった例もありません』だって」

友美「何？」

幸雄「アメリカの軍隊に入らなきゃだめなんだ」

友美「じゃあ友美もそれに入る」

一同笑う。

母親「それは無理よ。だって友美は日本人なんだから」

父親「おかしいだろ？毛利さんや向井さんとか、たくさん宇宙に行ってるじゃないか」

幸雄「それは『ミッション・スペシャリスト』。乗組員のことだよ。パイロットはアメリカ人しかなれないんだ」

友美「やだ。パイロットがいい。友美が動かすの！（父親のほうをむいて）本当はだめなの？」

父親「うーん……体を鍛えればなれるかもしれない」

母親「お父さん！」

友美「体鍛えればいいんですよ。友美、絶対なる」

#住宅街

走る友美。

友美の声「なる。絶対になる」

#坂道

走る友美。

#宅地造成地

山を切り崩している工事現場。

「立ち入り禁止」と書かれた柵をよじ登り、中に入っていく友美。

まだ伐採されていない森のほうに歩いていく友美。いとおしそ
うに木をなでる。

#森

友美、足場の悪い中を、頂上まで走り抜ける。
太い枝につかまり大回転を始める。

#宅地造成地

人気のないところに残されているブルドーザー。
住みかを失い迷い込んだ猪の親子。友美が木の枝を掴んで睨み
つけると逃げていく。
友美、街全体が見渡せる場所に座ると、ペンダントの中からボ
ロボロになったメモ紙を取り出し丁寧に広げる。「宇宙飛行士に
なるために」と書かれている。
夜空に輝く満天の星。

友美「なる。絶対になる」

#友美の想像

友美を乗せたスペースシャトルが宇宙にむかって飛んでいく。
5歳の友美の声「ねえおじさん。友美宇宙飛行士になりたいの。どうすればな
れるかな」

おじさん「それはむずかしいな」

#「おじさん」の家(回想)

動物の剥製、植物標本、世界中の砂漠の砂などであふれた部屋。
窓からは芝生が敷き詰められた庭が見える。

部屋の隅で遊んでいる少年。(5)

スペースシャトルの模型と大きな望遠鏡の横に立つ5歳の友美。
真剣な眼差しで「おじさん」を見つめている。

友美「だめなの？」

おじさん「最低でも二十年はかかるかもしれない。それにいくら頑張ってもだ
めかもしれないよ。それでもいいの？」

友美「なる。絶対なる」

微笑んで頷く「おじさん」。紙にペンで何かを書くときそれを友美
に渡す。

おじさん「ここに書いたようにすれば可能性はある。でも甘くないよ」
紙を見ながら、読んでやる「おじさん」。

おじさん『「一、体を鍛えること。特に平衡感覚が必要。視力はパイロットの命、
大切に」

#英会話教室(回想)

大人に混じって外国人講師と楽しげに話している小学生の友美。
おじさんの声 「二、英語は必須。医学を含めた科学一般の広範な知識。コンピ
ュータに精通すること」

#道(回想)

走る小学生の友美。
おじさんの声 「三、航空機免許取得を目指し、航空学校に進むこと。アメリカ
留学できれば一層いい」

#友美の部屋(回想)

スペースシャトルの模型の飾られた部屋で勉強をしている友美。
おじさんの声 「四、最終的にはアメリカに帰化し、空軍、海軍、あるいは海兵
隊に入り、テストパイロット学校を目指す」

#学校(回想)

高い跳び箱を軽々と飛び越える友美。拍手するクラスメイト。
おじさんの声 「しかし、今後の宇宙開発の経緯に注意すること。日米は宇宙開
発を共同で進めつつある。日本人のままでも、シャトルパイロッ
トになるチャンスは、ごくわずかながらある」

#おじさんの家(回想)

おじさん 「そして最後。これが一番重要なことだよ」
友美 「……」

#宅地造成地

座って「おじさん」のくれたメモを読んでいる友美。
友美 「五、絶対に、希望は捨てないこと」
友美、メモを丁寧にたたんでペンダントの中にしてしまう。
友美 「おじさん……」
目の前に広がる夜景。
友美 「この街のどこかにいる」
空を見上げる友美。
友美 「また会いたいよ」
夜空に輝く満天の星。その光だんだん大きくなっていく。
友美 「……」

流星雨が友美にせまってくる。
手をのばす友美……。

友美「え？……」

手の中が光っている。星をつかんでしまったのだ。
星は動き出すと、友美の体を貫く。

#街

街全体に溢れる無数の流星雨。

#宅地造成地

溢れる光。

やがて静寂。

友美「いまの何？」

いつもと変わらない街。星の消えた空。虫の声。
立ち上がる友美。ふたたび走り出す。
友美の額には小さな点がついている……。

#タイトル「星虫」

#おじさんの家(友美の夢)

少年(おじさんの息子)の腕に蚊が止まっている。少年はそれを叩いて潰すと、口に持っていこうとする。

友美「何すんのよ。やめなさい」

少年「どうして？」

友美「どうしてって不味いでしょ」

少年「どうして不味いつて知ってるの？」

友美「知ってるわよ。だって食べたことがあるもん……え？」

背後から「おじさん」が声をかける。

おじさん「いいんだよ。その子には食べる権利があるんだ」

友美「食べる権利？」

おじさん「人間と他の生物の命は対等なんだ。だから殺したからには食べるのが命に対する礼儀だとは思わないかい？」

友美、部屋に飾られた動物の剥製を指して

友美「じゃあこれは……」

おじさん「みんな私が食べたものばかりだよ」

友美「はあ……」

友美「ああああ！」
少年自分の殺した蚊を口のなかに入れる。

#友美のマンション。友美の部屋

目覚し時計の音。五時半を指している。
夢から覚める友美。起き上がるとカーテンをあけ自分の机に座り教科書を広げる。
蚊が飛んできて友美の腕に止まる。
蚊を叩きつぶそうと手を上げてやめる。

友美「食べられない……」

友美、激しく手を振って蚊を追い払う。
友美、大きくため息をつくとき、机に置いてあった鏡を取って見る。

友美「あ……」

額の上に装飾品のような物体が張り付いている。トルコ石のような半透明のブルーで二センチほどの大きさのものだ。
部屋の外からテレビの音が聞こえてくる。部屋を出て行く友美。

#同、居間

友美が入ってくる。

友美「ねえ……」

幸雄「(人差し指を唇にあてて)シッ！」

父親、母親、兄の幸雄が座ってテレビを見ているが、皆の額に装飾品(星虫)がついている。
電話がなり友美が受話器をとる。

友美「はい氷室です」

警察官「〇〇署の神田と申しますが、署長はいらっしゃいますか」

友美「少々お待ちください」

父親に受話器を渡す。

友美「署長いらっしゃいますか、だって」

父親「もしもし……そうか。わかったすぐそっちに向かう」

#テレビで流れるニュース

額に星虫をつけたアナウンサーが原稿を読んでいる。

アナウンサー「この『星虫』は世界中で約六〇%の人に付着し、昨日の流星雨と関係があるのではないかと考えられています。いまのところ人に危

害を及ぼすことはありません……」

#友美のマンション、居間

友美「星虫……」

頷く父親と幸雄。

母親「私こんな気持ち悪いもの我慢できない」

母親の額から星虫が落ちる。

友美「あ……」

落ちた星虫に父親、幸雄、友美が駆け寄る。

しばらく見ている三人。

幸雄「(友美に)おい」

友美、恐る恐る手にとって見る。

父親と幸雄が興味深そうに覗き込む。

友美、星虫を母親の額につけようとす。

母親「やめて！なにすんのよ」

逃げる母親。

友美、幸雄の額につけてみるが、星虫は下に落ちる。

友美「動かないね」

父親「なんだ。取ろうと思えば簡単に取れるんだな。母さん、すぐ署に行く。

警察にも電話が殺到してるらしい」

幸雄「(友美に)お前どうする？取るか？」

友美「……あ、お兄ちゃんメガネは？」

幸雄「え？(顔をさわる)あれ、でも見えるぞ」

友美「しばらく付けてみようかな」

#友美のマンション、前

自転車に乗って出てくる制服姿の友美、足を止める。

友美「すごい……」

遠くの山が木の一本一本まではっきりと見える。

#道

自転車に乗って走る友美。

遠いところでも細部まではっきりと見える。

#学校近くの道

徒歩や自転車で学校に向かう生徒たち。

そのなかに友美もいる。
生徒たちのほとんどは星虫をつけており、メガネをかけた生徒は一人もいない。

後ろから宮田直人(16)が声をかける。

直人「委員長」

友美、自転車を止めて振り返る。

走り寄ってくる直人。

直人「おはよう」

友美「おはよう宮田君」

歩き出す二人。お互いの額を見て

友美「やっぱり昨日の流星雨が原因なのかな」

直人「星虫は人間の視力をあげるみたいだね。ほら、だれもメガネをしていない」

友美「私ちよつと気に入ってるの。なんかかわいくない?」

直人「そう?変わってるね。前から思ってたけど委員長って虫みたいなものに動じないよね」

笑う友美。笑顔に見とれる直人。

直人「あのさ、委員長ってウエダマリコって聴く?」

友美「うちのお兄ちゃん好きだけど、私はあんまり聴かない」

直人「親父の知り合いからチケットもらえるみたいなんだ……」

後ろから田中隆(16)が声をかける。

隆「すげえじゃん。俺大ファン。連れてってくれよ」

直人「た、隆!なんでお前がいるんだよ」

隆「いいじゃん。それでいつだよ。ウエダマリコ」

直人「お前の分はねえよ。二枚だけなんだ」

隆「だったら松本誘えばいいだろ」

直人「なんで洋子がでてるんだよ」

隆「お前から仲いいじゃねえか」

直人「だから隣に住んでるだけだっつうの」

通学路は竹やぶの中に入っていく。

別れ道があり、その奥に松本洋子(16)が立っている。

友美「洋子ちゃん」

洋子、びっくりして振り返る。

洋子「あ、ねえちよつと来て」

友美と直人、隆、走って洋子のもとに行く。

#竹林

洋子「あれ見て」

洋子が指差したほうを見ると、横たわった人間の足が見える。

直人「なんであんなところに倒れてるんだろう」

友美「行ってみよう」

洋子「ちよつと待ってよ。死んでたらどうするの」

友美「いずれにせよ警察に連絡しなきゃいけないでしょ」

友美を先頭に恐る恐る足のほうに近づいていく四人。

横たわっている体が見える。動かない。

そのとき……

「ゴオオオオ」と大きないびき声が聞こえる。

友美、寝ていた人間の顔を見る。

友美「寝太郎君」

直人「おい、寝太郎。起きろ」

起き上がる相沢広樹（通称寝太郎 16）

寝太郎「あ、……どうも」

隆「お前は寝るために生まれてきたのか？ そうやっていつでもどこでも

寝てるからみんなから寝太郎って呼ばれるんだぞ」

寝太郎「……」

友美「こんなところで何してるの？」

寝太郎「実は……宝探し」

友美、寝太郎の背後に広がる深い森を見る。

洋子「宝探し？」

直人「なにガキみたいなこと言ってるんだよ」

洋子「寝太郎君。学校は？」

寝太郎「……」

友美「これ以上休むと進級も危ないよ。学校行こうよ」

寝太郎「……後から行くよ」

隆「寝太郎、留年しても俺のことは呼び捨てでいいからな」

直人「まだ決まってねえだろ、バカ（友美たちに向き直って）そろそろ行かな

いと遅刻するよ。行こ」

寝太郎「……」

去っていく友美、直人、洋子、隆。

四人の後ろ姿を見つめる寝太郎。

#学校、教室

担任の教師が出席を取っている。

教師「相沢……相沢広樹」

友美の隣の席は空いている。

教師「今日もいないのか。『三年寝太郎』は……飯島、上田、加藤、……」
生徒の名前を読み上げていく教師。
友美、ぼんやりと隣の席を見る。

#竹林(回想)

寝太郎の背後に広がる深い森。

#学校、教室

教師、進路希望調査表を配りながら。

教師「今から配る進路希望調査表に志望大学と学部を書いて、月曜日までに提出するように」

進路希望調査表を受け取る友美。第一志望から第三志望までの大学と学部を書く欄がある。

教師「みんなも既に知っているとは思いますが、星虫は人体に悪い影響を与えているという報告はまだないようだ。しかし今後状況が変わることもあるので、新聞やテレビのニュースには十分注意を払っておくように。しかし宇宙船事件以来の大騒動だな」

友美「宇宙船事件……」

#山林(回想)

墜落した宇宙船の周りに、警察、自衛隊、世界中からやってきた新聞記者などが集まっている。

友美の声「三年前、日本のある山の中で宇宙から来たものと思われる全長約百五十メートルの宇宙船が発見された。五千年程前に落下したものと恐れ、少し破損しているものの、ほぼ完全な状態だった」

#世界は大騒ぎ(回想)

友美の声「初めて発見された地球外文明の所産に、世界は大騒ぎになった。マスコミと科学者は大挙して日本に押し寄せ、本格的に調査に取り掛かるようになった」

#発見者の女性(回想)

発見者の女性。佐久間和美(21)

友美の声「それに待ったをかけたのが飛行船の発見者であり、なおかつ山の所有者である女性だった。法的にはその飛行船は彼女のものなのだ」

#国連宇宙開発機構の発足(回想)

友美の声「彼女は国連に調査研究組織を作り、そこで買ってもらいたいと要請した。

地球より遥かに進んだ文明の技術が手に入るかもしれない……。国連宇宙開発機構が発足し、世界中が期待に胸を膨らませた」

#記者会見場(回想)

世界中のプレスを前に会見にのぞむ和美。

和美「私はあの宇宙船らしき物体を国連に買っていただきたいと思っております」

集まった記者から歓声が起こる。

和美「この物体を世界の財産にしてください。人類の英知を傾けて分析し、傷ついた地球を救う手立てにしてください。ですから当然、価格はタダ同然にしたいと思います」

会場からどよめき。

和美、目の前の記者に語りかける。

和美「あなたでもこの物体のために百ドルぐらいは出しても惜しくはないでしょう？」

記者A「YES」

和美「ではこの物体を国連に……。一兆ドルで買って頂きたいと思えます」

会場は静寂に包まれる。

和美「もう一度言います。世界中の人類が一人百ドルずつ。つまり一兆ドル日本円にして約百二十兆円です。それ以下には一銭もまけるつもりはありません」

プレスからは悲鳴にも似た驚きの声。

会場の隅で薄笑いを浮かべて会見を聞いている吉田秋緒(24)

友美の声「結局国連宇宙開発機構が発足し、彼女に一兆ドルは支払われたのだが、国連が買い取ったわずか数日後に宇宙船は永久に失われてしまった」

#山林(回想)

科学者、新聞記者、警察、自衛隊など多くの人々が見守る中、自衛隊員が宇宙船の入口を爆破する。

いきなり活動を始める宇宙船。飛び上がる。

友美の声「中に入ろうとして入口を爆破したとたん、宇宙船はいきなり活動を始めると、猛烈な勢いで飛び立ち、……」

#大気圏(回想)

宇宙船、爆発する。破片が飛び散る。

友美の声「大気圏を抜けたところで、大爆発と共に消滅してしまったのだ」

#建設中の海上都市

海に浮かぶ旧空港。レジャーランド建設工事は進む。

友美の声「発見者の女性は百兆円をもとに、経営破たんした空港を買い取り巨大なレジャーランドを現在建設している」

#学校、教室

教師「……まあとにかく、あの宇宙船事件から世の中は急速に変わったよな。超伝導はほとんど実用段階にきているし、核融合もあと三年ぐらいでなんてかなるそうさ。もし国連に金があれば『進化計画』だって不可能じゃないはずだ」

友美「……!!」

教師、黒板に絵を書いてスペースコロニーへの移住を説明。

教師の声「一日に数万人を宇宙に打ち上げる基地と、巨大な宇宙工場の建造。

その後の月植民地とスペースコロニーの建設。あの夢のような計画が、

案外現実になるかもしれない」

洋子「でも先生、間に合いますか？」

教師「間に合うとは？」

洋子「地球の環境です。人間が宇宙に出るまでに地球は持ちますか？私いろいろなものアレルギーを持っていて、それには環境汚染が関係しているみたいなんです。もし大崩壊理論が正しければあと百年しか残っていません」

隆「(直人に小声で)なんだよ、ダイホーなんとかって？」

直人『『大崩壊理論』。百年以内に地球の環境が崩壊して人類が絶滅するっていうやつ』

隆「あれデタラメなんだろ」

教師「(隆と直人に)そこ!(洋子に)続けて」

洋子「そんなこと起こるわけないとか、考えすぎだとか言われていますが、そうは思えないんです。……」

#環境破壊によって蝕まれていく地球のイメージ映像

洋子の声「オゾン層破壊でも、二酸化炭素排出制限でも、ダイオキシンでも、環境問題はまだなにも解決されていません。特に人口問題は解決の糸口さえ見つかっていません。人口が百億人を越える日も近いんです。アフリカと南アメリカの森林は焼畑と炊事用の薪のために全滅しかけています。そうなれば大崩壊は、現実に何歩も近づいてしまっています」

#学校、教室

生徒D「本当なの？最近テレビでやらなくなったでしょう。改善されてきているのかと思った」

洋子「解決どころかこのままじゃ熱帯雨林はあと十年で消えるといわれている。……」

#環境破壊によって蝕まれていく地球のイメージ映像

洋子の声「フロンガスの規制も途上国では守られていないし。いくらクリーンエネルギーやエコカーや燃料電池が普及してきてるっていつても、一部の先進国だけ。二酸化炭素もメタンガスも増える一方。しかも人口増加率が上がっている。あと五十年もすれば百五十億に届くくらいに……」

#学校、教室

洋子「日本のマスコミは視聴率をとれなくなったから環境問題を取り上げなくなっている。視聴者も飽きただろうって。そんな問題じゃないのに」

教師「確かに松本の言う通りかもしれないな。……」

#環境破壊によって蝕まれていく地球のイメージ映像

教師の声「例えばオゾンホールがどんどん拡大して赤道上にも広がっている。皮膚癌が十年前の五倍になったために、オーストラリアの海水浴場はがら空きだったらしい。異常気象は毎年ひどくなる一方だ。……」

#学校、教室

教師「だからこそ国連の科学者たちができもしない進化計画を発表したんだろう」

生徒D「でも進化計画って本当に夢みたいなものなんでしょう？」

教師「ああ、本音を言えば例え十分な資金があったところで、国連の進化計画は技術的に無理だと思うな。でも、もし大崩壊理論が真実ならば、宇宙に移住するしかないのかもしれない。オゾン問題にしても、人口抑制

策にしても、対症療法に過ぎないわけだ。地球を蝕む癌細胞を地球以外のところに移すしかないのかもな……。思いがけず話がわき道にそれた。(進路希望調査表を指して)これは締め切り厳守だからな

教師、友美を呼ぶ。

教師「氷室、ちよつと」

友美、教師のもとに行く。

教師、紙袋を友美に渡す。

教師「悪いけれど、これを相沢の家に届けてくれないか」

友美「……」

教師「進路希望調査表と俺の手紙が入っている。これが地図だ。学校のすぐそばだから帰りがけにでも寄ってくれ」

友美「……わかりました」

去っていく教師。

友美、大きくため息をつきながら地図を見る。竹林の奥にある一軒屋。

ふと顔を上げる友美。

教室の外に背の高い美しい女が立っている。吉田秋緒(24)だ。

友美、女に声をかける。

友美「なんでしよう？」

秋緒「相沢広樹はいるかしら？」

友美「(緊張気味に)……いませんけど」

秋緒「いない？」

友美「あの、後から来るとは言っていましたけど……」

秋緒「そう……じゃあ申し訳ないけれど彼が来たら渡してもらえないかしら」

秋緒から手紙を受け取る友美。

去っていく秋緒。

手紙の裏には「吉田秋緒」と書いてある。

秋緒の後姿。

友美「……どっかで見た人だ」

#学校、全景

終業ベルが鳴る。

#学校、教室

授業が終わり帰り支度をする生徒たち。

洋子「ねえ委員長。マックでも寄ってかない？」
友美「ごめん。寝太郎君ちにこれ届けなきゃいけないの」
洋子「ええ！そんなの引き受けなきゃいいじゃん。一人でいける？」
友美「うーん……」
洋子「付き合っただけよつか」
友美「本当？助かる」
直人がふたりのところに来る。
直人「寝太郎んちに行くの？俺も付き合うよ」
洋子「いいよ。届けるだけなんでしょ。二人で大丈夫よ」
直人「俺も副委員長だからさ。委員長だけじゃ悪いだろ」
洋子「直人部活があるんでしょ？」
直人「今日休みなんだ。(友美に)早く行こうよ」
不愉快な洋子。

#竹林の中の道

友美の笑い声。
不愉快そうに一人で歩いている洋子。
その前を歩いている友美、直人。そしてふたりの真ん中になぜか隆がいる。

直人「ところでなんでここにお前がいるんだ」
隆「お前こそなんているんだよ」
直人「俺は副委員長だぞ」
隆「だから何だ。手紙を届けるだけなら一人で十分だろ」
直人「いいだろ、別に」
隆「だったら俺だっていいんだよ」
別れ道にさしかかる。
隆「こっただぞ。寝太郎んち」
直人「……」
竹林の奥深くに入っていく四人。

#相沢家、前

竹林の中の道を歩く四人。
友美「この地図だと確かにこっただよねえ……」
四人の前にそびえ立つ巨大な豪邸。
直人「これか？嘘だろ」
隆がベルを押す。

緊張して待つ四人。

門の扉が開き相沢老人（78）が彼らの前に立ち四人を睨みつける。

相沢「……………」

隆「あ、相沢君いますか？」

相沢「私も相沢だ」

隆「寝太郎君いますか？」

相沢「寝太郎？」

直人「（小声で）広樹だ。バカ」

隆「広樹君……………さんいますか」

相沢「君は誰なんだ」

隆「た、田中です……………」

直人「僕たち広樹君と同じクラスのものです」

相沢「広樹ならこの屋敷の裏あたりだろう。どこかにおる」

#竹林

寝太郎を探して歩き回る四人。

隆「ねた……………広樹さーん」

直人「もう帰ろうよ。それポストに放りこんで」

友美「そんなわけにはいかないよ。私もねた……………相沢君に話したいことがあるし」

洋子「直人ひとりで帰れば。あとは私たちだけでいいから」

直人「チッ」

隆「あ！」

寝太郎を見つけて駆け寄っていく隆。

古い壺を抱えて立っている寝太郎。

隆「広樹さん！探しましたよ」

寝太郎「いいよ。寝太郎で」

隆「（百八十度態度を変えて）寝太郎！テメエどこに行ってたんだ」

寝太郎「どうしたの、みんな？」

友美「寝太郎君。（紙袋を渡して）これ先生から。なんで今日も来なかったの？

本当に進級できなくなるよ」

寝太郎「……………ごめん」

友美「それから、これも預かったよ」

友美、秋緒からの手紙を渡す。

寝太郎、裏に書かれた差出人の名前を見て顔色が変わる。

手紙を無造作にポケットの中にしまいこむ。

友美「この吉田秋緒さんって誰。すごく綺麗な人だったけど」

寝太郎「まあちよつと……。ところでさ、これ見てよ」

持っていた壺から鍵を取り出す。

直人「これが朝言つてた宝なのか」

寝太郎「いいものを見せてあげるよ。来て」

寝太郎について歩いていく四人。

#門

古い門の前に立つ五人。長い塀の向こう側は森になっている。

寝太郎「ここには誰も入ったことがないんだ」

友美「この中に何があるの？」

洋子「森があるのは何となく知ってたけど……」

寝太郎、鍵を差し込むと扉が開かれる。

目の前に広がる森。

直人「おい寝太郎。こん中になんか宝が隠されているのか？」

寝太郎「これが宝だよ」

寝太郎、中に入っていく。

おそろおそろ寝太郎に続いて中に入っていく四人。

#相沢家裏の森

一言もしゃべらず深い森を歩く五人。かすかに泣き声のような音。

樹齢数百年の木々。

湧き水が小川を作っている。

イタチやうさぎなどの小動物。

直人「夢見てるんじゃないよな」

洋子「これ全部自然林だよ」

友美「自然林？」

洋子「何百年も人間の手が全然入ってない。そうでないとこんなふうにならないよ」

友美の星虫が反応する。

すすりなくような声。

友美「なんかこの森悲しんでいるように感じるんだけど、私だけ？」

直人・隆「俺も」

洋子「私も」

友美「よくわからないけど『助けて』って言っているみたい」
寝太郎「実はここ、近いうちに開発されるんだ」

一同「ええ！」

友美「だめだよ。こんな素晴らしい森を潰すなんて」

直人「寝太郎、ここお前んちの土地なんだから。なんとか止めろよ」

寝太郎「無理だよ。今は親戚の手に渡ってるんだ」

隆「じゃあ、その親戚を説得してさ」

寝太郎「何度もやったよ。おじいちゃんと僕で何度も会いに行った。でも説得できなかった。ここにはマンションが建つ」

一同「……」

#道

とぼとぼと帰り道を歩いている五人。誰も何も言わない。

寝太郎「じゃあ、僕はここで」

友美「ありがとう寝太郎君」

隆「寝太郎、ちゃんと学校来いよ」

照れながらも心から嬉しそうに微笑む寝太郎。

直人「あ……」

美しい夕焼け空が見える。

立ち止まりしばらく空を眺める五人。

夕焼けに見とれる友美。星虫が反応する。

友美「え？……」

目から涙がこぼれ落ちる。

友美「こんなに綺麗だったっけ」

隆、一人だけ大粒の涙を流して泣いている。

隆「夕焼けってなんで美しいんだろう。だって自分から美しくなるうって

思っていないだろ」

寝太郎「フィットしているからじゃないかな」

一同「……？」

寝太郎「きっと人間も地球の一部なんだ。だから心も体もぴったりくるんだと
思う」

一同「……」

友美「ねえ、あの森守ろう。きっとできることがあるよ」

洋子「そうだよ。あんなところにマンションなんか建てちゃだめ」

直人・隆「よし、守ろう」

寝太郎「……」

隆 「(寢太郎に)お前もだろ」
寢太郎 「行くよ」

#夜・道
走る友美。

#原田教授の家
コンピュータのキーボードをたたき続けている寢太郎。
時計を見る。午後七時。
寢太郎、立ち上がり窓を開ける。
しばらくすると家の前の道を友美が走っていくのが見える。
姿が見えなくなるまで友美を見つめている寢太郎。
ドアをノックする音。

寢太郎 「はい」
原田教授が入ってくる。

原 田 「どうだい広樹君」
寢太郎 「この間先生から指摘を受けたプレ・ログの問題点を自分なりに分析してみたんですが、どうしても行き詰まっています」

原 田 「あと一步のところまでできているんだ。ゆっくりやればいいさ。ところで秋緒ちゃんが日本に帰ってきてきているみたいだねえ」

寢太郎 「さあ……：：：知りません」

原 田 「雑誌で写真見たけれど、すっかり綺麗になっちゃって。私のことおぼえているかなあ」

寢太郎 「……」

#新聞
一面に「世界各地でアース・クライ」

#テレビのニュース
アナウンサー 「破壊されようとしている自然の叫び声が聞こえる、という現象が世界各地で起きています。星虫所有の市民たちによる自然保護運動が世界中で高まっています……」

#直人の部屋、翌朝
新しいシャツに腕を通す直人。入念に髪型を整えている。
携帯電話がなる。

直人「もしもし……！」

カーテンをあける。

隣の家に住む洋子が見える。携帯を耳に当て、直人に手を振る。

洋子「ねえ今日一緒に行くよ」

直人「ああ……ちよつとまずいかな」

洋子「なんでよ。行くんでしょ」

直人「行くけどさ、寄らなきゃいけないところがあるんだ。悪い」

携帯を切る直人。

#道

立っている直人。

友美がやってくる。

友美「宮田君」

直人「おはよう委員長」

友美「……おはよう」

直人「たまたまこっちに用事があったんだ」

友美「……」

#道

友美を見つめたまま何も話せずにいる直人。

直人「……クソ」

友美「え？」

直人「あ、……いや。なんかさ隆が出てきそうな雰囲気だなんて。あいつ

とは子供の頃から腐れ縁なんだよね」

洋子「おはよう」

目の前に洋子が立っている。

友美「……おはよう」

直人「……」

#電車の中

一言も言葉を交わさない友美、直人、洋子。険悪な雰囲気。

#駅の改札

不機嫌そうな直人と洋子。

困った顔の友美。

居心地が悪そうな寝太郎。

改札から隆がやってくる。

友美「遅いよ田中君」

隆「悪い悪い。ちよつと聞いてくれよ。昨日一晩寝ずに考えたんだけどさ。

グッド・アイデアがひらめいたよ」

友美・直人・洋子「……………」

寝太郎「どんなアイデア」

隆「聞きたいか？びつくりするぞ」

頷く友美と寝太郎。

隆「あの森に自然博物館を建てるんだよ。自然を守らなきゃいけないってことを訴える拠点にするんだ。そうすれば寝太郎の親戚だって儲かるだろう」

一同「……………」

#道

誰も何もしゃべらない。

隆「(寝太郎に)俺なんかまずいこと言ったかな」

寝太郎「ちよつと、あれは……………」

隆「ナニイ！」

寝太郎「いや、根本的などころで間違ってるかも……………」

直人、立ち止まる。

直人「寝太郎、ここだよな」

寝太郎「うん。ここ十八階」

目の前に『篠原開発(株)』と看板のかかったビルがある。

洋子「田中君は来ないで。ここで待ってて」

隆「え？ちよつと。なんか俺にも役に立つことあるだろ」

直人「役に立ちたかったら帰って寝てろ」

隆「おい……………」

隆をのぞく四人はビルの中に入っていく。

ふて腐れる隆。

隆「なんだよ。だからあの森を潰して自然博物館を建てれば……………(気づく)だめじゃん」

#篠原開発(株)、社長室

社長の篠原昭二(50)が椅子に腰掛けている。額には星虫がついている。

篠原「だからね広樹さん、先祖代々の土地だかなんだか知らないけれど、今

では私のものですからね。別に相沢家から騙し取ったわけじゃないんだから。どう使おうと私の自由でしょ」

洋子「あの土地には貴重な自然が残されているんですよ」

篠原「そうみたいだねえ、見たことないけど」

洋子「なんであの土地なんですか。都会に使われていない土地がいくらでもあるでしょう」

篠原「そんな高いマンション誰も買ってくれないでしょう。こっちも社員の生活がかかっているんだ。あんたらがあ土地買ってくれるっていうんなら話は別だけど」

直人「あの森は守らなきゃいけないんですよ。今地球がどんな状況なのかあなただって知ってるでしょう。百年以内に地球の環境は大崩壊するんですよ」

篠原「大崩壊理論なんて私は信じないなあ。例えそうだとしてもね、あんな小さな土地を守ったって焼け石に水でしょ。環境破壊なんて世界中で山ほど行われているんだから、先にもつとすべきことがあるんじゃないの？なんで私のところが最初なのか理解できないね」

直人「……………」

友美「篠原さん。確におっしゃることに一理あると思います」

篠原「……………」

友美「例えあの森を守ったとしても大崩壊を止めることはできないでしょう。土地を所有するだけでも莫大な税金がかかることも知っています。でも一度でいいですから、あの土地を見ていただけませんか。中に入るだけでいいんです。そうしていただけたら私たち二度とここには来ませんから。お願いします」

篠原「……………」

広樹「お願いします！」

直人・洋子「お願いします」

篠原「……………」

友美、寝太郎、直人、洋子「……………」

篠原「…………都合良すぎやしないかい？ あんたら、今どこに住んでる？ 一戸建てか？ マンションか？ その土地には以前何があった。木が生えてたんだろ。動物の巣があったんだろ。自分たちだって多かれ少なかれ自然を破壊しながら生きているんだよ。悪いけどねえ、こっちは慈善事業でやってるわけじゃないんだ。帰ってくれ」

友美、寝太郎、直人、洋子「……………」

#相沢家裏の森

寝太郎が鍵をあけると彼に続いて友美、直人、洋子、隆が中に入っていく。

五人の星虫が反応する。

鳥の巣とヒナ。小動物の親子。土、木、草、水……。

助けを求める地球の声。

相沢「篠原のところに行つて来たのか」

相沢老人が入ってくる。

寝太郎「おじいちゃん。やっぱりだめだった。この森はマンションになるよ」

相沢「森を眺めながら」私もここには初めて入ったよ。素晴らしい。ここま

で素晴らしいかつたとは……」

友美「私たちに力がなかったんです。すみません」

相沢「あなたが謝ることじゃない。あの土地を守れなかった私たちが悪かつ

たんだ。結局流れに身をまかせしかないんだよ。諦めよう」

友美「私この森を潰したくない。死んでも守りたい！」

相沢「……命を粗末にしてまで守るべきことなんて何もない！簡単に死ぬ

などと口にするな！」

友美「人間は勝手です。地球は誰のものでもないはずでしょ。鳥や動物や木

や花にだって人間と同じように生きる権利があるんですよ。それを人間

はお金さえ払えば自然を好きないようにできると思っている。お金は地球

よりも重いんですか？」

相沢「私の知っている人間であなたと似たようなことを言っていた奴が一人

おつたよ」

友美「……」

相沢「本当に馬鹿な奴だった。その男は環境破壊に憂いを抱いてな、私財を

なげうって東南アジアにわたって、人々に砂漠化の恐ろしさを説きなが

ら稲作を教えたんだ」

#タイ、山の中(回想)

坊主になった山。タイ人に植林を指導している『馬鹿』(彼は相

沢老人の息子Ⅱ「おじさん」であるが、明らかにしない)

相沢の声「ある年の事だ。その馬鹿はタイに渡つた……」

#同(回想)

植えられた樹木。喜び合う『馬鹿』とタイ人たち。

相沢の声「最初はうまくいったんだが、カンボジアで内戦が起きて、難民が

その山里近くまでやってきた……………」

#燃える森(回想)

相沢の声「難民だって食わねばならん。そいつらは植林したばかりの山を燃やし、焼畑にしおった……………」

#タイ人とカンボジア人の争い(回想)

相沢の声「怒ったのはタイの連中だ。彼らは武器を持ち粗末な難民キャンプを襲った。何十人も死んだ。そして難民たちも武器をもっておる。ただちに報復だ。今度はタイ人が殺された……………」

#相沢家裏の森

相沢「……………こうなったら泥沼だった。そこへしゃしゃり出たのが日本からやってきた馬鹿だ。タイの山里の連中もカンボジアの難民も、共に貧しい連中だ。虐げられたもの同士が殺しあうこともないと、頼まれもせぬのに、双方の調停に入ったんだ。その結果どうなったと思う?」

友美「どうなつたんですか?」

相沢「両方から恨まれたんだ……………」

#『馬鹿』の小屋(回想)

夜中タイ人たちが「馬鹿」の小屋に忍び込む。

寝ていた「馬鹿」を袋叩きにする。

タイ人A「裏切り者!」

殴られつづける「馬鹿」

#相沢家裏の森

相沢「最後は瀕死の重傷を負って日本に強制送還された。男は家族にも見放されて失意のうちに死んでしまった。まだ若かったよ。他の可能性がいくらでもあったのに」

友美「……………」

寢太郎「……………」

相沢「その馬鹿はたった一人で地球を救おうとしたんだ。確かに奴は高い理想と志をもっていたかもしれない。しかし自分の能力からかけ離れたことに挑む人間は、必ず破滅する」

友美「……………」

寢太郎「……………」

相沢「まだ若いんだ。あなたにできることは他にいくらでもある。悪いことは言わん。この森は諦めよう」

一同「……………」

突然隆が立ち上がる。

隆「ひらめいた！グッド・アイデア」

洋子「田中君！」

隆「それでもこの森は守らなきゃいけないんだ」

直人「おい、隆。何をひらめいたんだ？」

隆「いいか、よく聞けよ。俺が言いたいことはただひとつ。

……………自然は大切だということだ」

洋子「それがグッド・アイデア？」

隆「そうだ」

しらけるほかの四人。

隆「ここで待ってろよ」

猛然と走り去っていく隆。

直人「行っちゃったよ」

洋子「なんかあいつ、ずれてるよね」

#商店街

ものすごいスピードで走る隆。

骨董屋の前で立ち止まり店の中に入っていく。

#相沢家裏の森

友美「田中君っていつも馬鹿なことばかり言うじゃない」

洋子「っていうかただの馬鹿」

友美「一生懸命やってくれてるよ」

直人「淋しいから仲間に入りただけだよ」

友美「……………うーん、でもここ一番って時にやってくれそうな感じがするん

だけど……………」

直人・洋子「そーかー？」

友美「寝太郎君はどう思う……………？」

眠っている寝太郎。

#篠原開発棟、前

ビルの中に入っていく隆。

#同、一階ショウルーム、受付

受付嬢のところをやってくる隆。

隆 「すみません。社長に会いたいですか？」

受付嬢 「失礼ですがお名前頂戴できますか？」

隆 「頂戴できます……田中です」

隆にうさんくささを感じる受付嬢。

受付嬢 「田中様……お約束は頂戴しておりますか？」

隆 「いえ、頂戴していません」

受付嬢 「大変申し訳ないのですが篠原はただいま外に出ておりますが」

隆 「そうですか……外ってどこですか？」

#同、社長室

ドアをノックする音。

篠原 「どうぞ」

秘書が中に入ってくる。

秘書 「社長、今受付に怪しげな男が来ているんですが、『ゆとりの杜』建設予定地で遺跡が見つかったと言っているんですよ」

篠原 「遺跡だと？」

秘書 「その男によると縄文時代の土器が大量に見つかったとのことですよ」

秘書、篠原に泥のついた茶碗のかけらを見せる。

篠原 「……」

秘書 「かなり嘘っぽいのですが……追いかけますか」

篠原 「待て。本当だったらどうする。発掘だなんだと言ってあの土地を取り上げられかねんぞ」

篠原、スーツの上着を着る。

篠原 「遺跡だかなんだか知らんが、全て掘り起こしてやる」

#篠原の車の中

後ろ座席に座る篠原と隆。

篠原 「その遺跡とやらはそんなに貴重なものなんですか？」

隆 「はい。大発見ですね。本当に凄いですよ」

篠原 「ほお、どんなふうに凄いですか」

隆 「とにかく凄いですよ。新聞に載りますよ」

篠原 「お宅まさかうちをゆするうなんてことは露にも考えていないでしょうね。私の友人が手の綺麗な人間ばかりじゃないっていう、でたらめな噂もあなただって聞いたことがあるでしょうから」

隆 「…………やべえ」

#竹林

車から降りる隆と篠原。

篠原 「じゃあ案内していただきましょうか」

隆 「…………はい」

中に入っていく二人。

#相沢家裏の森

門を開け中に入っていく二人。

相沢 「…………」

篠原、友美たちを見る。

篠原 「最初から怪しいとは思っていたが何をたくらんでいるんだ」

森を見渡す篠原。

風に揺れる枝。小川のせせらぎ。土の感触…………。

篠原の星虫が反応する。

立ち止まる篠原。

強烈なアースクライが篠原を襲う。

その場にうづくまる篠原。

相沢 「昭二君」

篠原 「おじさん…………わたしが間違っていました。この手で恐ろしいことを

するところでした。…………この土地はお返しします」

その姿を見ている友美たち。

#相沢家、前

去っていく篠原の車を見送る相沢老人と友美たち。

相沢 「田中君。そしてみなさん、どうもありがとう」

洋子 「(隆に)すごいじゃん。やっぱやってくれる人だったんだね」

隆 「いやいや。それほどのことでも」

直人 「でも見直したぞ」

隆 「なんか食いにいこうぜ。直人がおごってくれるって言ってるし」

直人 「言ってるよ」

隆と洋子歩き出す。

直人 「(友美に)委員長。帰ろ」

友美 「うん…………」

洋子が睨むように友美を見る。

友美「……………」

寢太郎「委員長」

友美「何？」

寢太郎「ちよつと僕の部屋に来てくれないかな。見てほしいものがあるんだ」

直人「……………！」

友美「いいよ」

直人「だったら俺も……………」

寢太郎「悪いけど委員長と二人で話したいんだ」

直人「……………」

友美「ごめん。みんな先に帰ってて」

相沢家の方に歩いていく友美と寢太郎。

#相沢家、中

寢太郎の後について長い廊下を歩く友美。

いくつもの部屋が並んでいる。

寢太郎「委員長。いまでも宇宙飛行士になりたいんでしょ」

友美「……………！なんでそのこと知ってるの。誰にも話していないのに」

寢太郎「……………」

照れ笑いする寢太郎。

友美「まさか」

洋間に案内される。

動物の剥製、植物標本、世界中の砂漠の砂。

寢太郎を見つめる友美。

友美「寢太郎君、あなた……………」

寢太郎の顔とおじさんの息子の顔がオーバーラップ。

寢太郎「そうだよ。おぼえていてくれた？」

友美、ペンダントを外し、中に入っている「おじさん」のメモを寢太郎に渡す。

友美「ずっとおじさんに会いたいと思っていたの」

寢太郎、一瞥して

寢太郎「確かに親父の字だ」

メモを大事にしまう友美。

友美「おじさんは……………」

寢太郎、壁を指差す。「おじさん」の遺影が飾ってある。

友美「……………」

寢太郎「さっきおじいちゃんが話した『馬鹿な奴』ってあれは親父のことなん

だ」

友美「いつ亡くなったの」

寢太郎「委員長が来てからすぐじゃなかったかな。あの頃はもうかなり悪かったみたいだね」

友美「そう……」

友美の目から涙が溢れてくる。

友美「おじさん……」

泣き崩れる友美。そつと部屋から出て行く寢太郎。

友美、スペース・コロニーの模型を見つめる。

その脇に科学雑誌「ニュートン」が置かれている。友美、しおりがはさまれているページを開くと「進化計画」についての論文が載っている。そして片隅に吉田秋緒の名前と写真。再び寢太郎が入ってくる。

寢太郎「落ち着いた？」

友美「寢太郎君。この人思い出した。進化計画を発表した人でしょ。まだ若いのに宇宙開発機構の幹部に抜擢されたとか……日系人だと思ってた」

寢太郎「ああ。進化計画っていうのはもともと親父が考えたものなんだ」

#進化計画のイメージ映像

宇宙に建造したスペースコロニーに移住する人間。

寢太郎「人口がここまで増えてしまったらどうしても地球は疲弊してしまう。まさか減らすわけにはいかないからね。だから地球を休ませるためにも、ある程度の人間が宇宙に移住する必要がある、っていうのが親父の説なんだ」

#相沢家。洋間

寢太郎「当時は誰からも相手にされなかったけれど、そこに載ってる女が今の技術に置き換えて発表したんだ」

友美「この吉田秋緒さんって……」

寢太郎「姉貴だよ」

友美「……」

寢太郎「僕も一緒にアメリカに来てって言われてる」

友美「いいじゃない」

寢太郎「あいつと母親は僕らを捨てたんだ。親父の葬式にも現れなかったくせに」

友美「……………」
寢太郎「他に見てもらいたいものがあるんだ。来て」

#倉

広い倉の一室。コンピュータがならんでいる。

友美「これプロトタイプじゃない」

寢太郎「知ってるの？」

友美「初めてニューロチップを搭載したパソコンでしょ。よくは分からないけれどお兄ちゃんから話は聞いたことがある。工学部なの」

パソコンが立ち上がる。モニターに映し出された星虫の3D映像。

友美「これ寢太郎君が作ったの」

寢太郎「姉貴が送りつけてきたデータなんだ。本当は門外不出なんだけど」

友美「……………すごいね、寢太郎君」

寢太郎「すごくなんかないよ。僕は他になにをやってもだめだから」

寢太郎、友美に鍵を渡す。

寢太郎「委員長、この部屋自由に使ってもいいよ」

友美「え？」

寢太郎「委員長だったら星虫が何なのかってことを、僕なんかよりもちゃんと理解できると思うんだ」

友美「なんでそう思うの？」

寢太郎「なんとなくだけど……………」

#テレビの映像

アナウンサー「星虫所有者による自然保護運動は世界各地で激しさを増しています……………」

#ブラジル・アマゾン

数百万人による自然保護運動。

#フィリピン

木材伐採を拒否した労働者によるストライキ。

#友美の部屋、夜

寝る友美。

友美「星虫」

額の星虫をやさしくなでる。

#イメージ映像

星虫を抱きしめる友美。母親と子供のイメージ。

#海上都市、ヘリポート(夜明け前)

ヘリコプターから秋緒が降りてくる。

#同、社長室

和美と秋緒二人きり。

秋緒「社長。星虫の力は我々の予想を遥かに超えていたようです」

和美「ねえ、誰もいないわ。昔のようにしゃべろ、秋緒。……私怖いの。あんな恐ろしいものが、私が世界中にばらまいたってことにならない?」

秋緒「和美、聞いて。大国のエゴに左右されない、宇宙進出のためだけの新国際組織を私たちは作ろうとしているの。人類にとってどうしても必要なことなの……私を信じて」

和美「私、逃げたい」

秋緒「もしもあなたが墜ちるときには、私はどこまでも一緒についてあげてあげるから」

#友美の部屋

眠る友美。

変態する星虫。その姿大きくなっていく。

#街

情景。夜明け。

#友美のマンション。友美の部屋

早起きして勉強している友美。

星虫の色が変わる。そして……

星虫「グオオオオオオオオオオ！」

#街

街じゅうの星虫が鳴き声を上げる。

星虫の声「グオオオオオオオオオオ！」

街じゅうに響く音。

#友美のマンション。友美の部屋

幸雄がドアを開けて入ってくる。(星虫をはずしている)

幸雄「友美！」

友美「お兄ちゃんノックぐらい……」

幸雄「今すぐ星虫を取れ！危険だ」

友美「え、どうして」

今からニュースの声。

友美、部屋から出て行く。

#同、居間

テレビでは星虫関係のニュースが流れている。

テレビを見ている父親と母親。父親も星虫を外している。

父親「世界中でパニックになっている。友美もいまして星虫を外しなさい」

友美「なんで？」

幸雄「いいか。星虫は毎日ものすごいスピードで成長している。全ての感覚

を増進させることがわかったんだ」

友美「え？」

幸雄、友美の腕を軽くはじく。

反応する星虫。激しい痛みが友美の全身を貫く。

友美「痛いっ！」

幸雄「こんなちよつとした痛みでも何倍にもなって感じるんだ」

父親「メジャーリーグでもちよつとクロス・プレーのたびに重傷者がでて、

世界中のプロ・スポーツは中止になったそうだ」

母親「お願い、友美ちゃん。はずして」

友美「いやだ。殺せないよ」

父親・母親・幸雄「友美！」

友美「じゃあ私行くから」

逃げるように居間から出て行く友美。

幸雄「星虫はテレビやラジオの電波をキャッチできる。今どういう状況になっているのか自分で聞いてみる」

#同、外

自転車に乗って出かけていく友美。

友美「……」

立ち止まる。

意識を集中する友美。昨日とはまた違った世界。赤外線、電磁波などが見える。

電波を捕らえてラジオの音が聞こえてくる。

ラジオの声「……詳しいことはわかっていませんが、星虫を危険視する声が高まっています……」

集中するのをやめる友美。通常の世界に戻る。

友美「……」

#相沢家、寝太郎の部屋

ドアをノックする音。

パジャマ姿でノートパソコンに向かっている寝太郎。星虫は外していない。

寝太郎「はい」

ドアがあく。友美が入ってくる。

寝太郎「委員長！どうして……」

友美「何時だと思ってるの」

友美、そこらへんにあったシャツとズボンを取って寝太郎に投げつける。

友美「十数えるうちに着替えること。いいね」

友美、部屋の外に出る。

友美の声「一、二、三、四、五……」

あわてて着替える寝太郎。

#同、部屋の外

友美「六、七、八、九、十。開けるわよ」

寝太郎の声「ちよっと……」

勢い良くドアをあける友美。

ズボンをはこうとしていている寝太郎。

寝太郎のブリーフが友美の目に入る。

友美「キャッ！」

あわててドアをしめる友美。

#同、外

友美、寝太郎の手を引っ張って外に出てくる。

友美「はやくしなさいよ。遅れるでしょう」

寝太郎「委員長ってそんな人だったっけ」

友美「どんな人だと思ってたの？ 私は寝太郎君を更正させるっておじさんと約束したんだからね。（時計を見て）ほら遅れる」

友美、寝太郎を自分の自転車に乗せると、後ろの荷台に乗る。

友美「早く行って！」

よろよろと自転車をこぎだす寝太郎。

#道

直人、洋子、隆が時計を気にしながら走っている。

三人を追い越していく自転車。友美と寝太郎が二人乗り。

洋子「委員長……」

隆「嘘だろ」

直人思わず立ち止まる。

直人「……」

寝太郎の腰にしっかりとつかまっている友美。

#教室

ほとんどの生徒がメガネをかけている。星虫所有者は友美、寝太郎、直人、洋子、隆の五人だけになった。

眠っている寝太郎。あきれ顔で見る友美。

教師「……というわけで星虫所有者は部活動をしばらく控えるように」

寝太郎の星虫がもぞもぞと動き出す。

星虫「グオオオオオ！」

教師「おい！」

友美あわてて寝太郎の額を触りながらなんとか星虫をなだめようとしている。

寝太郎も起きて友美と一緒に星虫をなでるが鳴きやまない。

友美「寝太郎君。動かないで！」

友美、寝太郎に体をよせて、額をやさしくなでる。

二人を見つめる直人。

やがておとなしくなる星虫。

教師「ちよつとかなわんなあ。なんとかならんのか」

寝太郎・友美「すみません」

再び話しに戻る教師。

友美と寝太郎、顔を見合わせて笑う。

直人「……」

友美たちと直人を見る洋子。

#同、裏庭

立っている直人。

友美がやってくる。

友美「宮田君」

直人「……委員長の星虫かなり大きくなったね」

友美「授業中、何度も鳴くから。響いたでしょ」

直人「ちよつとね」

友美「……」

直人「……」

友美「大事な話って何？」

直人「実は。俺……入学したときから……委員長のことが……」

友美「……」

直人「好きだったんだ」

友美「……」

直人「俺と付き合ってくれないか」

友美「……」

直人「……」

友美「私ね、子供の頃からの夢があるの。それになることは本当に難しいことなんだけど……どうしても叶えたいの」

直人「……」

友美「だからいまは、男の人とお付き合いはしないことに決めてるの。宮田

君のことはいい友達だと思っているけど……」

直人「……」

友美「……ごめんなさい。本当にごめんなさい」

直人「……委員長の夢って何？」

友美「宇宙飛行士。パイロット宇宙飛行士」

直人「……」

友美「おかしいでしょ……笑ってもいいよ」

直人「笑わないよ。俺応援するから。宇宙飛行士頑張れよ」

去っていく直人。

友美「……宮田君」

振り返る直人。

友美「これからも、私と友達でいてくれる？」

直人「もちろん」

優しく笑う直人。

#同、教室

授業中。うわの空の直人。
友美を見る。淋しそうな後姿。
直人を見つめる洋子。

#道

学校の近くを歩く直人、洋子、隆。

洋子「あ、あれ」

友美と寝太郎と一緒に歩いているのが見える。

隆 「あいつら急に親しくなったよなあ。昨日なんかあったのか」

直人「知るか！」

洋子「……」

直人「あのさ、悪いけどお前ら先に帰っててくれないか」

洋子「直人！」

学校に戻っていく直人。

#学校・グラウンド

星虫をつけたままサッカー部の練習に加わろうとする直人。

部員A「おい星虫取ったほうがいいんじゃないか」

直人「いいんだ」

#同

試合形式の練習。

直人がパスを出すと部員Bが後ろにそらす。

直人「なにやってんだ！」

#同

ボールを持った直人。ディフェンダーをかわした後、逆サイドにパス。しかし部員Cは追いつけない。

直人「おい！まじめに走れ！」

直人を睨むほかの部員たち。

#同

ドリブルをしながら相手陣にせまっていく直人。
ゴールが近づいてくる。

部員Dが直人にせまってくる。

部員D「調子に乗るな！」

部員Dのスライディングに足を取られる直人。

そのまま地面にたたきつけられる。

反応する直人の星虫。痛みが全身に響く。

直人「ああああアアア！」

その場に倒れこむ直人。

ほかの部員たちが近寄ってくる。

部員F「おい大丈夫か」

直人「……………ほっといてくれ」

#同

フィールドの外で倒れている直人。動けない。

構わず練習を続けている部員たち。

雨が降ってくる。

#同

どしゃぶりの雨。

部員たちはいなくなり、直人倒れたまま雨に打たれている。

傘をさして直人を見つめている洋子。

ようやく立ち上がり、歩き出す直人。

直人「……………」

洋子に気づく直人。

洋子、直人にタオルを差し出す。

洋子「だめだよ。無茶なことしちゃ。いくら悔しいからって」

洋子からタオルを受け取り顔をふく直人。

直人「わかったような口きくんだな」

洋子「わかるよ。私小さい頃からずっとそばで見てたんだよ。直人のこと」

洋子のさし出した傘に入る直人。

見詰め合うふたり。

直人「……………」

洋子「……………ナオト」

隆「ナオトー！」

後ろから隆が走ってきて、ふたりの真ん中に割り込んでくる。

隆「おい、大丈夫か。星虫つけて部活は無謀だろ」

苦笑いの直人。

邪魔されて不機嫌そうな洋子。

隆 「あのさラーメン食べに行こうぜ。駅前にうまい店見つけたんだ」

直人 「お前って奴は……（くくくと笑い出す）いいよ。行こう」

怒った洋子。先に歩き出す。

洋子 「勝手に行けば」

直人 「洋子も一緒に行こうよ」

さっさと行ってしまおう洋子。

隆 「なに怒ってんだよ。（直人に）俺なんか悪いこと言った？」

直人 「（笑いながら）さあ？」

隆 「おい松本。待ってくれよ。俺傘もってねえんだよ」

洋子を追いかけていく隆。

#道

自転車を押す友美、傘をさす寝太郎、二人で歩いている。

ふたりは星虫を通じて電波に耳を澄ましている。

友美 「……星虫はどんどん外されているようね。ショックで病院に運ばれている人も多いみたい」

寝太郎 「まだ未確認だけど世界中で千個を切ったって。日本でも厚生労働省が所有者の説得を始めたって。一チャンネルでやってる」

友美 「じゃあ、もうすぐ私たちのところにも来るんだ」

寝太郎の肩が雨で濡れているのに気づく友美。

秋緒の乗ったバイクがふたりの前に止まる。

寝太郎 「……」

秋緒 「ガール・フレンドができたの。広樹」

寝太郎 「あのことならこの間断つたはずだ。親父の葬式にも来なかったくせに」

秋緒 「知らされなかったのよ。それにお母さんはあなたに何度も会おうとしたのよ。でも会わせてもらえなかった。あなたを捨てたわけじゃないわ」

寝太郎 「なにをいまさら」

秋緒 「進化計画にはあなたがどうしても必要なの」

寝太郎 「協力できない」

秋緒 「そう言うと思った……もうひとつ重要な話があるの。（友美を見て）あなたにも関係があるわ。星虫をいますぐはずしなさい。もうすぐ取り返しのつかないことになるわ」

友美 「なぜですか？地球の環境破壊が止まったから役目は終わったとしても言うんですか？そんなの勝手です。人間だけの都合です。この子は生きているんです。命があるんです」

寝太郎「どんな理由があろうと食べないものは殺さない」

秋緒「いい。よく聞いて。このままでは星虫は成長を続けて宿主を捕食する可能性が高いの。つまりあなたたちは星虫に食べられてしまうのよ」

友美「例えそうだとしても私は外したくはない。星虫は地球を救ってくれたんです。だから私もこの子を守る」

秋緒「救ってなどないわ。今環境破壊が止まったとしても、地球はすでに致命的なところまで破壊されてしまったの。大崩壊は止められないの。人間が宇宙に出て地球が修復するのを待つしかないの」

友美「進化計画は本当に実現するんですか？ 資金的にも技術的にも難しいはずです。例えばソレノイド・クエンチ・システムに必要なエネルギーも超伝導コイルもまだまだ未来の技術だと聞いてます」

寝太郎「……！」

秋緒「よく勉強してるわね。あなた名前は？ まだ聞いてなかったわね」

友美「氷室です。氷室友美」

秋緒「じゃあ友美。教えてあげるわ」

#ソレノイド・クエンチ・システム（イメージ）

巨大な海上都市。

秋緒の声「進化計画の第一段階は、シャトルを打ち上げるために赤道上に巨大な海上都市を作るの。そうしないと大量の人類や物資を宇宙に運ぶことができないわ」

打ち上げられるシャトル。人類と物資を乗せて宇宙に飛んでいく。

秋緒の声「シャトルは超伝導コイルを使う。そうすれば秒速十一キロまで加速可能なの。これなら一日千トンの物体を静止軌道まで運ぶことができる。もつとも人間を運ぶためには百二十キロほどのランチャーが必要だけど、設置するのに理想的な海底と海底山脈はもう見つけてあるわ」

宇宙を飛ぶシャトル。

友美の声「地球をまわる衛星になるために必要な速度は秒速八キロです。秒速十一キロだったら三万六千キロ離れた静止軌道まで上れるでしょう」

#道

友美「大気との摩擦を考えれば数万度になります。そんな高温に耐えられる物質は地球上にはないわ」

秋緒「それがあるの」

友美「……！」

秋緒「宇宙船よ」
友美「……三年前の」
秋緒「そう。異性人の乗っていた船の外殻の複製に成功したの。セラミックの数百倍の耐熱性、熱遮断性、耐久性を持っている外殻をね」
友美「……資金はどうするんですか。億単位ではすまないはずですよ」
秋緒「確かに。でもそれは最大の障害ではないわ。それよりも今一番の問題は人材難……。（寝太郎を見る）進化計画にはどうしてもあなたが必要なの。あなたのプレ・ログが」
寝太郎「そんなことまで知ってたのか……」
秋緒「完成間近なんですよ」
寝太郎「……」
友美「なんですか？プレ・ログって」
秋緒「広樹が開発中のコンピュータ言語なの。巨大構造物設計のための画期的な新言語。将来の宇宙開発や海底開発の大きな武器となるわ」
寝太郎「でも完全にクリアできてない。本当にできるかどうかわからないし……」
秋緒「どんな状況なのか原田先生から詳しく聞いているわ」
寝太郎「自信がないよ」
秋緒「……まあ、いいわ。考えといて。また来る」
友美「寝太郎君。進化計画に参加したくないの」
寝太郎「したいよ。親父の夢だったわけだし。でも自信がないんだ。あんなものが本当に役に立つとは思えないんだ」
友美「いいんだよ。星虫取っても」
寝太郎「嫌だよ。僕は委員長が取るまで取らないから」
星虫が泣き出す。
星虫「グオオオオオオ！」
友美「ほら、もういいですよ。黙って」
星虫が泣き止む。
寝太郎「それってものすごい近所迷惑だよね」
友美「そうなの……ねえ、これからしばらく寝太郎君ちに泊めてくれない？」
寝太郎「え?!」
友美「宮田君や洋子も呼んで。寝太郎君ちの倉だったら大きな音だしても大丈夫ですよ」

寝太郎「……………」

#相沢家 玄関

玄関から友美と幸雄が入ってきて、寝太郎がふたりを迎える。

寝太郎「こんばんは」

友美「うちの親がお兄ちゃんと一緒にじゃないとだめだっていうの。いい？」

寝太郎「もちろん。はじめまして」

幸雄「よろしく」

寝太郎「もうみんな来てるよ。どうぞ」

友美・幸雄「おじゃまします」

#同、居間

既に来ていた直人、洋子、隆が座っている。

食卓に並んだ夕食を秋緒が用意している。

秋緒「あら、いらっしやい」

不愉快そうに秋緒をにらむ寝太郎。

友美「吉田さん。どうしたんですか？」

秋緒「どうしたって、ここは私が育った家なのよ」

友美「……………絶対料理しない人だと思ってた……………」

秋緒「……………」

#同

食事をしている友美、寝太郎、直人、洋子、隆、秋緒、幸雄、

相沢老人。

玄関の呼び鈴が鳴り、相沢老人が席を立つ。

それぞれが星虫を通じて電波をキャッチしている。

友美「世界中で百個を切ったって……………」

洋子「日本ではどうも私たちだけみたいね」

寝太郎「完全に星虫は悪者だな」

隆がいきなり笑い出す。

隆「うひゃひゃひゃひゃ」

一同「……………」

直人「関係ない番組みてるし……………」

隆「(気づいて)え、何？」

一同冷ややかな視線。

相沢老人が戻って来る。

寝太郎「誰？」

相沢「マスコミだ。すごいことになってるぞ」

一同立ち上がり二階に行く。

#同、二階

窓から外を見ると相沢家のまわりをマスコミが取り巻いている。

#同、外

リポーター「星虫所有者は日本国内では五人だけとなりました。その五人の高校生は現在この屋敷に集まっている模様です……」

#同、二階

再び玄関の呼び鈴が鳴る。

相沢「うるさい！取材は受けんと言ったはずだ。帰れ！」

F・O

#同、居間

F・I

マスコミ関係者、友美の父親他の警察官、役所関係者、地元の人など二十人以上の人でごったがえしている。

友美ら星虫所有者はマスコミに囲まれてインタビューを受けている。

酒と料理が振舞われ宴会状態になっている。

一人で切り盛りしている秋緒。

#同、台所

秋緒「(食器を片づけながら)なんで私がこんなことしなきゃいけないの！」

客Aの声「こっちにビール頂戴」

秋緒「はい、ただいま」

ビールを持って出て行く。

#同、居間

ビールをテーブルに置く秋緒。

マスコミに囲まれている隆。星虫がもぞもぞ動いている。

秋緒「耳ふさいで！コップ守って！」

星虫、鳴き出す。

一瞬に静まり返る部屋。
星 虫「グオオオオオオ！」

いくつかのコップが割れる。

#同、倉

ワークステーション前に座る寝太郎と幸雄。

ニューロコンピュータのモニターに星虫の3Dモデルが現れる。

寝太郎がキーを叩くと星虫の甲殻が取れた映像に変わる。五つの目を結ぶビーズのような線。

幸 雄「たいしたもんだ。これ全部君が作ったのか？」

寝太郎「姉が僕を脅かすために持ってきたんです。それよりここを見てください」

矢印がビーズの一点を指す。

寝太郎「ここは一種の光ファイバーで星虫の弱点です」

寝太郎、幸雄に電動ドリルを渡す。

寝太郎「委員長の星虫が巨大化しすぎるようだったらこれで穴をあけてくれませんか。僕もどうなるかわからないんで」

#同、居間

酔いつぶれて眠る客たち。

#同、倉

パジャマ姿の友美、洋子、幸雄、隆、直人、寝太郎。

真ん中の幸雄を境に男女が別れて、布団が敷かれている。

友 美「すごい一日だったね」

直 人「俺たちこれからどうなるんだろう。全然想像つかないよ」

洋 子「いつかみんな卒業してさ、同窓会なんかで会ったとき、今日のことなんて話すんだろうね」

隆 「あのさ、一人ずつ秘密を告白しないか」

直 人「なんだそれ？」

隆 「好きな人が誰か言おうぜ」

友美・洋子「えー!？」

隆 「じゃあまず寝太郎からな。お前の好きな娘だれだ」

眠っている寝太郎。

隆 「……」

幸 雄「君は誰が好きなんだよ」

隆 「おれは最後でいいよ」

洋子 「言い出しついでしょ。あんたから言いなさいよ」

隆 「お前らも言うんだぞ」

洋子 「やだよ。絶対言わない」

直人 「俺も」

友美 「私もパス」

隆 「なんだよ。きたねえなあ。じゃあ言うけどさ………バレー部の森川さん」

一同 「ええ！」

洋子 「私委員長だと思ってた」

友美 「なんでよ」

直人 「俺も」

隆 「なんかあの娘美人じゃないけど性格いいんだよ」

幸雄 「(直人に)聞いてほしかったんだな。彼」

うんうんと頷く直人。

洋子 「私仲いいよ。紹介してあげようか」

隆 「本当？頼むよ。森川さんって付き合ってるやつとかいないのかなあ………」

#月

#相沢家、前

中に入れなかったマスコミが周りを取り囲み、車の中や地べたで眠っている。

#同、倉

物音で目覚める友美。

寝太郎が倉から出て行く。

#同、庭

座って空を見ている寝太郎。

友美 「なにしてるの？」

寝太郎 「委員長。宇宙を見てたんだ」

寝太郎の横に座る友美。

友美 「きれい」

寝太郎 「目を閉じたほうが綺麗にみえるよ」

目を閉じる友美。反応する星虫。
芝生の感触とかすかに聞こえる地球の声。
暗闇から少しずつ光が見えてきて、やがて友美の目の前に星空
が広がる。

#宇宙

地球が消え三百六十度全てが宇宙。斜め下に見える太陽。その
脇をまわる水星と金星。
広い宇宙に友美と寝太郎二人だけ。

寝太郎「ほら」

友美「どうして地球が透けて見えるの？」

寝太郎「ニュートリノだよ。地球を貫く宇宙線が見えるんだ」

#相沢家、庭

目を開ける友美。現実の世界に戻る。

友美、星虫をなでながら、

友美「この子は宇宙に帰りたいんだね」

寝太郎「あ、一チャンネルのニュース……」

アナウンサーの声「インドネシア人の女性が先ほど星虫を外しました。これで
現在世界中で生存している星虫は五人の日本の高校生のものを残すのみ
となりました……」

友美「また星虫が死んだ。世界で私たちだけなんだ」

星虫をなでる友美。

友美「私が守ってあげるからね……」

#登る朝日

#相沢家、外

眠っているマスコミたち。

#同、居間

眠っている客たち。

#同、倉

眠っている星虫所有者。

変態をする隆の星虫。その姿だんだん大きくなっていき隆の顔

を覆う。

星虫「グオオオオオ！」

あわてて起きる一同。

苦しがる隆。必死に星虫を外そうとする。

洋子「きゃー」

洋子が悲鳴をあげる。洋子、直人の星虫も彼らの顔を多い、友美、寝太郎は体全体を覆われている。

幸雄、隆の体を押さえつけると、星虫の弱点にドリルをあてる。

友美「やめてー！」

止めようとする友美を寝太郎が押さえる。

隆の星虫の鳴き声が止まる。死んだのだ。星虫を取る隆。

幸雄、苦しんでいる洋子、直人の星虫も殺す。

幸雄、友美の方を向く。

幸雄「友美。星虫を取るんだ」

友美「いや。私この子を殺せない」

逃げる友美。外に出て行く。

追いかける幸雄。

#同、門

門を出る友美。マスコミに囲まれる。

友美に向けられるビデオカメラとフラッシュ。

リポーター「現在星虫所有者は世界中であなたたち二人だけです。この危険な

物体をどうして外そうとしないんですか？」

友美「……………」

友美、ジャンプするとマスコミたちを超える。

逃げていく友美。追いかけるマスコミ。

#道

逃げる友美。

追いかけるマスコミ。

#学校

逃げる友美、校舎の中に入っていく。

階段を登り、屋上に逃げる。

追って来るマスコミ。

#同、屋上

友美「来ないで」

ジリジリと追い詰めていくマスコミ。

友美、柵を乗り越える。

友美「これ以上近寄ったら飛び降りるわ」

下を見ると友美を追いかけてきたマスコミや野次馬が校庭を埋めている。

友美に浴びせられる無数のフラッシュ。

友美「ごめん……もうだめだ」

友美の母親「友美ちゃん。お願い。もうやめて！」

顔を上げる友美。母親の姿を見つめる。

友美「お母さん……」

バランスを崩す友美。手を離してしまう。

友美「あ……」

マスコミ「……」

寝太郎「……」

まっさかさまに落ちていく友美の体。

反応する星虫。

友美の体が止まり、宙に浮く。

友美「……」

次の瞬間、ものすごいスピードで友美の体が遥かかなたに飛んでいく。

寝太郎「委員長！」

マスコミに囲まれていた寝太郎の体も宙に浮き、友美の去った方向に飛んでいく。

一同「……」

#空

寝太郎が友美に追いつく。

友美「どうなってるの！」

寝太郎「わからないよ」

空を飛んでいく二人。

眼下には地球が広がる。陸と海、山と都会、野生動物の群れ、世界中の人々。

友美「寝太郎君、見て。美しい」

友美、寝太郎の周りを自由に飛ぶ。

寝太郎「景色を見る余裕なんてないよ。どうやってコントロールするの？」
友美「心を空にして星虫の声を聞いて。どこに行きたがってるかわかるよ」
寝太郎「そんなこと言われても……」

#海上都市

飛んでくる友美と寝太郎。
海上に浮かぶ巨大な海上都市が見えてくる。
最高部が百メートルほどの四つの建造物が五キロほどの感覚を置いて正方形の四つの頂点を形成している。

友美「寝太郎君。見て。これ宇宙船事件の人が建てているレジャーランドよ。でもこんなところに人来るのかなあ」

寝太郎「これはレジャーランドじゃないよ。本当はソレノイド・クエンチ・シテムのための海上都市なんだ。ここからシャトルが発射される。まだ極秘情報だけど、今月中には発表される」

友美「じゃあ、あの女のやつて」

寝太郎「姉貴のアメリカ時代の親友なんだ。進化計画のスポンサー」

友美「実現するんだ。進化計画」

寝太郎「世界中から職員を募集することになる。もちろんパイロットもね」
友美「……」

寝太郎「委員長には話したかったんだけど。ごめん」
友美「いいよ、そんなこと。でももう戻れないね」

再び飛んでいく友美。
追いかける寝太郎。

#海の中

を進む友美と寝太郎。
色とりどりの熱帯魚の群れ。
海草と珊瑚でできた森。
全ての生物の母親である海の中。
自由にかいまわる友美と寝太郎。

#空

友美と寝太郎の頭上は真っ白に輝いている。バリアーと大気の摩擦のせいだ。
やがて輝きは消えてふたりは対流圏を抜ける。
夕映えが太く赤い線に変わり、海上と雲を染める。そして昼間

の地域が視界の端に入ってくると、それは少しずつ拡大していく。ふたりの真下で分かれている昼と夜。

#宇宙

大気圏を抜け、宇宙に飛んでいく友美と寢太郎。

宇宙からのメッセージが聞こえる。

友美「聞こえる？」

寢太郎「ああ。宇宙が僕たちを歓迎してくれている。人間が宇宙に帰ってきたことを祝福してくれてる」

気持ちよさそうに飛んでいる友美。

彼女は今、自由な天使。

寢太郎「友美ちゃん！」

友美「……………」

寢太郎「僕は、子供の頃から親父の友人に家庭教師をしてもらっているんだ。その人の家の窓からね、君が走るのを……………毎回毎回決まった時間に、君が走るのを、僕は見ていたんだ」

友美「……………」

寢太郎「一度も休まなかったよね。パイロットになるためのトレーニングなんだろう」

友美「……………」

寢太郎「友美ちゃん！僕は十一年間、遠くから君のことを見ていたんだ。僕の前にまた現れてくれる日を、ずっとずっと待っていたんだ」

友美「……………」

寢太郎「友美ちゃん！僕は……………君のことが……………」

流星群がふたりの近くを通りすぎていく。

寢太郎の愛の告白は轟音にかき消される。

寢太郎「……………」

友美「広樹」

友美、寢太郎に微笑みながら手を伸ばす。

友美「行こうよ！」

友美の手をしっかりと握る寢太郎。

手をつないだ友美と寢太郎。飛んで行く。

地球から離れていく二筋の光。

F・O

F・I

#学校、教室

授業中。

教師「みんなも知っているとは思いますが、昨日国連から進化計画の正式にスタートすることが発表された。それに伴ってプロジェクト・シテイの職員とし全世界から三万人の若者が公募されることになった……」

名簿に目を落とす教師。生徒の名前の横に志望校と学部が書いてある。東大、早稲田、慶応、と一流大学が並ぶ中、「氷室友美 パイロット宇宙飛行士」と書いてある。

教師「……」

だれも教師の言うことは聞いていない様子。

直人、洋子、隆はぼんやり外を見ている。

あるじのいない友美と寝太郎の席。

教師、話をやめて外を見る。

教師「(つぶやく)……氷室友美 パイロット宇宙飛行士」

#竹林の道

学校からの帰り道。

直人、洋子、隆が歩いている。

誰も一言もしゃべらない。

直人「なあ、今なに考えてる？」

洋子「たぶんふたりと同じこと」

直人「どこに行っただろう……」

空を見上げる直人と洋子。

隆「あのさあ、委員長と寝太郎って……やっぱりできてたのかなあ」

直人「……」

洋子「……」

ため息をつく直人。自分たちが守った森を見る。

感じる地球の声。

直人「おい！」

洋子「私も感じた」

直人「行ってみよう」

森にむかって走り出す直人と洋子。

隆「おい、どうしたんだよ」

ふたりを追いかけていく隆。

#相沢家、裏の森

門を開けて中に入っていく直人、洋子、隆。
森の奥に光が見える。

走っていく三人。足を止める。

倒れている友美と寝太郎。その近くで成虫になった星虫がふた
りを見守るように座っている。

一瞬ひるむ三人。

星虫「ギギギギギ」

おだやかな声で鳴く。

直人「大丈夫だ。何もしないって言ってる」

三人、友美と寝太郎に駆け寄る。

直人「おい！」

洋子「委員長！」

隆「寝太郎、起きろ！」

友美「ううん……」

目を覚ます友美と寝太郎。

寝太郎「ここはどこだ……?」

直人「生きてたのか！」

歓声を上げる三人。

友美、立ち上がると星虫たちに近づいていく。

友美「……」

一体ずつ星虫を抱きしめる友美。

星虫「ゴゴゴゴゴゴ」

震え出す二体の星虫。

揺れる地面。

一同「……」

轟音とともに上昇しはじめる星虫たち。宇宙にむかって飛んで
いく。

星虫たちを見えなくなるまで見守っている友美たち五人。

#寝太郎の部屋

友美、寝太郎、秋緒。

テーブルの上に書類を広げる。

秋緒「星虫の成分分析表よ。これがあるものの成分と完全に一致したの」

秋緒、宇宙船の写真を見せる。

友美「宇宙船。三年前の」

秋緒「星虫はこの宇宙船の子供だったようね」

#山林(回想)

宇宙船の中に入ろうと、入口を爆破したとたん、宇宙船が空に飛び上がり、大気圏を抜けたところで爆発する。飛び散る破片。

秋緒の声「爆発時に残っていた残骸の一つが卵だったの。三年かかって孵^{かえ}ったわけね。そして地上にばらまかれた」

#寝太郎の部屋

秋緒「あなたたちの星虫は今ここにいるの」

秋緒、テーブルの上に写真を見せる。太陽の写真。数個の黒点とプロミネンスが写っている。

友美「太陽！」

秋緒「あの綺麗な虫は太陽のエネルギーを食べて、さらに巨大化するわ。十年ぐらいで成虫になる。どうなると思う？」

友美「宇宙船の子供って言うことは……星虫も宇宙船になるってことですか？」

寝太郎「そしてどうも俺たちのところに戻ってくるみたいなんだ」

秋緒「あなたたちは恒星間宇宙船を育て上げたってことになるの」

友美「恒星間宇宙船？」

寝太郎「太陽系を抜けて他の恒星系に人類を人類を運ぶ宇宙船のことだよ。どんなに近い恒星でも四光年以上離れている。だから光の速さ以上のスピードが必要なんだ」

#宇宙(イメージ)

宇宙船に成長した星虫に乗った友美。銀河を飛ぶ。

秋緒の声「あくまでもこれはデータに過ぎない。あの未知の生物がどうなるか、まだ私にもよくわからないの。でもあなたと広樹は星虫のマスターになった。そして将来は銀河を飛ぶ宇宙船を自在に操れるようになる……」

#寝太郎の部屋

秋緒「……ってコンピュータが言ってるの」

友美「……」

秋緒「わかった、友美？あなたにはこれからみっちり学んでもらうわ」

友美「……」

F・O

F・I

#海上都市

テロップ「二年後」

完成したプロジェクト・シテイで入所式が行われている。

世界各地から集まってきた若者たち。

制服姿の友美と寝太郎もいる。

司会「続きまして、宇宙開発機構代表、吉田秋緒」

壇上にあがる秋緒。

秋緒「ここに集まったあなたがたは世界中から選ばれた優秀な人材ばかりです。今から五年後、スペースコロニーに最初の人類の移住が始まります。それまで養成期間として厳しい訓練が待っていますが、自分たちが人類の未来を握っていることに誇りと責任を常に持つていてください。

ここにいる一人一人は大きな夢を抱いているはずです。それをなによりも大切にしてください。挫折することもあるでしょう。そんなときこそ、夢を思い出してください。

秋緒「もしも本気でかなえようとしたならば、その夢は必ずかかいます」

寝太郎。

友美。

クレジット流れて。

了